

只見町の水辺林は未来への遺産 — ヤナギ科樹木の繁殖と更新 —

水辺には、多くのヤナギ科樹木（以下ヤナギという）が分布しています。只見町内を流れる只見川や伊南川にも、いたるところでヤナギが見られます。そのなかでも二〇〇三年に伊南川で発見された絶滅危惧種ユビソヤナギは、国内最大の分布域をもつヤナギです。ほかにも高木のシロヤナギ・オノエヤナギ・オオバヤナギ、低木のイヌコリヤナギ・ネコヤナギ・タチヤナギなどが見られます。これらのヤナギの多様な生き様を紹介しましょう。



▲水際に一列に並んだヤナギの実生

ヤナギの特徴

ヤナギといえば、水辺や公園に植栽されているシダレヤナギを思い浮かべる人が多いでしょう。ヤナギが水辺に多いのは確かですが、高山にも分布するなど、幅広い分布域を持っています。また、雄の木と雌の木がある雌雄異株ということも大きな特徴です。ヤナギの繁殖は種子によって行われますが、その多くは種子だけでなく栄養繁殖もします。ヤナギは、挿し木によって簡単に増やすことができます。

ヤナギの開花

只見町では、雪解けの進む四月になると、ユビソヤナギの開花が始まります。積雪がまだメートルもあるにも関わらず、ほかの樹木が葉を展開する前に開花します。雄花は開花して花粉を散布した後、雪の上に落下します。雌花は開花後、種子が成熟するまで樹上に残っていますので、雌雄の区別は簡単につきます。

五月になると、シロヤナギが咲き始めます。ネコヤナギなど低

木のヤナギは、樹高が低いときから花を咲かせます。十数メートルまで成長する高木のユビソヤナギやシロヤナギなども、樹高二、三メートルで花を咲かせます。ヤナギの花粉は、昆虫や風によって運ばれます。

種子散布

ヤナギの種子は開花後、一か月ほどで結実し散布されます。種子には綿毛が付いており、風に乗って遠くまで運ばれます。また、川の水に漂って岸にたどり着き、そこで発芽することもあります。種子の寿命は短く、せいぜい二週間程度です。

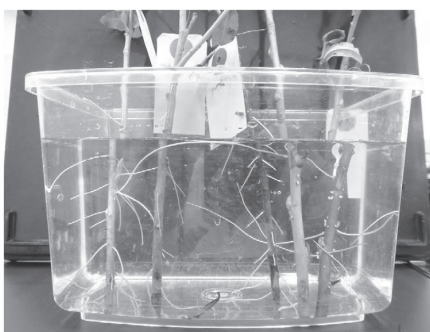
ヤナギの発芽と融雪洪水

ユビソヤナギやシロヤナギの種子が散布される五月から六月頃は、融雪洪水の水位が低下していく時期にあたります。融雪洪水後の岸辺には湿った細かな砂礫が堆積しており、一列に並んだヤナギの実生を見ることができます。

ヤナギの成長と環境

ヤナギは日当たりのよい場所を好む陽樹です。そのためにトチノ

キやサワグルミがブナとともに深畔林を形成し、林冠がうっぺいしているような河川幅の狭いV字谷にはあまり分布していません。林内で発芽できたとしても、光が差し込まないとすぐに枯れてしまうのです。しかし、流路変



▲水に浸かって発根したヤナギの枝

動が生じて河川幅が広く明るい中州があるような場所では、非常に早い成長を示します。

栄養繁殖

ヤナギは種子による繁殖のほか、枝による栄養繁殖を行います。ヤナギの枝を水につけておく

と、多くの種類は枝から発根してくるのを見ることができます。ヤナギの枝は発根性が高く、上流から流れてきた枝が発根し、個体として成長することもあります。また、大きな洪水などで倒され、土砂に埋没した枝や幹からは多数の萌芽が発生して、個体を維持しつづけます。

ヤナギの更新

ヤナギは種子による実生からの更新を行う一方で、枝などの発根による栄養繁殖を行っています。只見町のような積雪地帯においては、実生の定着は、融雪洪水が徐々に低下していく時期に砂礫地で起こりますが、大部分は翌年の融雪洪水で流失します。しかし、大規模な洪水の際には比高の高い新たな中州が形成されることも多く、ここで発芽した実生は融雪洪水で流失することもなく成長を続けます。それに対して、萌芽などの栄養繁殖は、大規模な洪水などによってヤナギ林が破壊された時に生じると考えられます。